中華民國史史料外編

主編：李雨風、沈友益

廣西師範大學出版社

厦門大學圖書館珍藏
主編：季嘯風、沈友益

中華民國史史料外編

——前日本末次研究所情報資料

日文史料
第十册

廣西師範大學出版社

要目

[illegible]

[illegible]

JUN-31928

羅文幹氏の過渡内閣

中央政權を護り受ける

京津

北京、一日發（支局）張作霖氏退京後の中央政權は顧維鈞の攝政内閣に譲る形式を採る方針だつたらしいが顧氏は固辭して如何しても受けないので結局羅文幹氏が總理代理として潘復氏に代り内閣を造る模樣である。

JUN-61926

北京にも尚ほ一沫の暗雲漂ふ

全然安心はされない

治安維持會の内面

瑞瑞河に第一線を置く奉天軍は愈々本國から續退却を開始すると傳へられ學良は昨夜離京してその司令部を瀋河に移した筈であり、いづれにしても北京から奉軍が撤退し、前門城頭高く

青天白日旗の飜へる

をこゝ二三日であらうと言はれてゐる。然し張作霖氏出京以來北京城内は何事平日と異る所なく極めて靜穩で、治安維持會も愈々明日正式に成立したことだし、事下の所此のまゝ推移せば大した危險も豫想されないが然し裏面に立入れば尚安心されぬ幾多の暗礁あり

三四方面軍も潰走

せぬとは保証されぬ。況や他の奉天軍は勿論のこと、三四方面軍中にも殿返部隊と目されるものも少からず此の潰兵一度北京に接近せば動搖を免れ難いであらう。第二は所謂治安維持會の内容である。王士珍江朔宗吳炳湘氏を主班にし總商

末次研究所

要目

會が援助し現在軍警を中心にする維持會は關係人物の範圍が廣いだけに會内に幾多の派が分れ、奉派あり山西派あり馮派あり、それに現在會は北京が準天勢力の說は置かれて居り再三張作霖氏から懇請されながら仲々王士珍老が出渋つたのも理由はその辺にあらう。會内の實勢力は大體に於て山西派が占めて居り三派方面軍一部をも既に抱き込みに成功したとも傳へられてゐる。此の會内各派の勢力爭ひが一旦表面に現はれたとなれば北京も案外一時ではあらうが平穏を缺ぐのではないかとも見られてゐる。

治安布告

軍警聯合辦事處

軍警聯合辦事處は一昨朝左の如き布告を發し治安維持を聲明する所あつた

大元帥の通電（本紙一昨日既報）を奉ずるに大元帥は内亂繼續して生靈塗炭に苦しむに忍ひず彼此覺悟を促すの全意を以てせり、現在部を率ゐ難京すると雖も而して京師の防務は本旅長の四十七旅全部をして駐守せしめ且つ周密防範の見地より更に他軍の大部を近畿に駐紮し以て鎮壓に資す。本警察總監は地方治安維持の責あり既に所屬機關を嚴密に佈置し晝夜城郊附近を巡査し特に戒嚴を佈いて奸人に乘ずべき隙を與へず。治安は十分保持してゐる。商民は務めてその生業を續け謠言を輕信するなく自ら相驚擾すべからず。若し謠言を捏造し公安擾亂を企圖する者を發覺逮捕した時は直ちに法により處罰すべしに布告して周知せしむ

末次研究所

目　要

學生連活躍の色あり

JUN 8 1928

遊行は治安會が許さず

北京八日發（某所着電）本日午前八時北京大學に李某氏を席とする學生大會が開かれた、參集する者七十、三民主義復活、北京九大學會聯合黨車歡迎開催の件等を決議し遊行を爲さんとしたが遊行は治安維持會が之れを許さず、[illegible]一の場合を換期して維持會では警察當局の本を巡警の爲めに中止した。

事態急と見て四國公使駈つく

JUN 10 1928

事件後と知つて南苑で直か談判

一方國民政府の[illegible]南苑に帶同する事の中止を要求したがこれまた有邪無邪に言を濁らし要領を得ないので各公使は韓復榘氏と直接交渉するより外に途なしと交渉を打切つて一時半一と先づ治安維持會に引揚げ支那側の元老連と協議した上四國公使は安邪[illegible]と自働車を連ね韓復榘氏と膝詰め談判をなすべく南苑に向つた南苑行きの結果は秘密に附せられてゐるが人聞する所に據れば四國公使は三時から五時まで韓復榘氏を訪問し武器の返還を求めた所韓氏は南京政府から電報して來たから左樣取計ふと逃げ手を張るので言を左右に托し即答を避け且つ、公使側から鮑軍を

末次研究所

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

要目

韓復渠軍不法にも 鮑毓麟軍を武裝解除す

外交團の面目も潰され 事件は重大化せん

JUN 10 1928
北京

北京治安維持の重要任務を果し一昨八日午前十時半北京市民の深き感謝を後に朝陽門から通州街道を東行した鮑毓麟軍は躊らずも通州の手前にて馮玉祥軍のため進路を阻まれ同日朝陽門外の東嶽廟に引返へせるが翌日午前十二時前後同處に押寄せ、來つた約一個師の韓復渠部下軍隊のため武裝を解除され全軍は丸腰のまゝ南苑河に送られた鮑毓麟氏は身邊の危險を感じてかフランス病院に避難した。

鮑毓麟軍は治安維持のため北京に殘留せるものでこの鮑軍の犧牲的態度に對しては外交團方面でもこれを多とし既に自發的に外交團は南京政府及び韓介石、馮玉祥、閻錫山三將に對し「鮑軍の退京に際し武裝を解除せぬやう一旦つその退路を阻害せぬやう照會を發し南京政府からは同意の回答が來てゐるといふ關係もあるため本事件發生の報を聞くや日英米和四國公使は直ちに現場に駈けつけまた韓復渠氏と直接交渉をなすべく南苑に自働車を馳する等活動を開始した本事件は頗る重大性をもつてゐるので各方面の注目を惹いてゐる

JUN 10 1928
北京

鮑軍に同情集る 韓軍不信義の聲 日と共に高まる

鮑毓麟軍の武裝解除事件に關しては鮑毓麟氏が外國使節の駐劄の地でもあり百餘萬の市民を有する北京に於て不祥事件の發生をなからしめべく治安維持會の懇請を容れて踏み止つたといふ犧牲的精神に對する同情並に治安維持會並に外交團が既に同軍の北京退出に就てはこれを武裝解除するとか或は退路を阻害する等の擧に出でざることの保證を求め南京政府から既に同意の回答があり、且つ鮑軍退出の前日既に馮軍側には鮑軍の武裝解除をなさんとの意向が見えた所から治安維持會と韓復渠氏との間に鮑軍を安全地帶まで送り出すといふ諒解が出來た後の事件であるだけに各方面にも鮑軍に對する同情と馮軍に對する不人氣とは日と共に高まりつゝある一方この事件で治安維持會並に外交團の面目は丸潰れとなつたわけでこの問題がどう發展するかは見物である。

末次研究所

要目

國民革命軍に降伏を強要し

東嶽廟に押寄せ

遂ひに武装解除

JUN 10 1928

北京

北京治安維持會の懇請を容れて山西軍の入城迄北京に殘留し秩序維持に當つてゐた鮑毓麟軍は山西軍も城外に達した七日午前十一時朝陽門に集結していよ〳〵北京を退城し奉天に歸還する段取りであつたが、これより先き北京を出城せる鮑軍の第五十五團は六日夜通州に於て韓復榘軍のため武裝を解除された。この報に接した鮑毓麟氏は朝陽門に集結せる第六十一、第百七十二兩團を引攣めて景山に引返し治安維持會を通じ前約の如く鮑軍の退路を防害せぬことと及び武裝解除をなさぬことに就て韓復榘氏と交渉したところ韓氏からも安全地帶まで送出すとの言質を得て六日午前十時半過ぎ山西軍が彰儀門より入城せる同時刻に治安維持會並びに各代表團米國及び和蘭公使その他多數の內外人に見送られ朝陽門から通州街道を東行せるが治安維持會の熊希齡氏等は鮑軍を安全地域まで送り屆けんと同行した。然るに鮑軍が通州の手前三[illegible]里の地點に達するや通州駐屯の韓復榘軍の[illegible]治安の部隊はその行路を阻み

我等は三民主義を奉じ國民革命に盡しつゝある。故に貴軍も青天白日旗を掲げて我等と革命の事業を共にせよ

と降伏を強要し、これに應ぜざれば武裝解除の擧に出でん勢を示した。茲に於て同行の熊希齡氏等は、鮑毓麟軍は北京內外人の懇望を容れ殘留して治安維持にあたつてゐたもので其退出に就ては國民政府と外交團並に治安維持會との間に安全に送還するの諒解も出來居り且つ韓復榘氏もこれを承諾してゐる筈である

と辯語せるが馮治安軍は頑として肯かず急報に駈けつけた韓軍の李蓋謀長の言葉を退け、形勢はいよ〳〵危險となつたので鮑毓麟氏は部下を率ゐて昨夜朝陽門外の東嶽廟に引上げて來たところが韓復榘軍は鮑軍の武裝を解除せんと昨朝一師餘の兵力をもつて東嶽廟に押寄せて來たこの急報に接した治安維持會側では即時汪大燮江朝宗等の元老株が現場に駈けつけ鮑軍の說明に努めたが肯かばこそ片端から武裝解除を開始した

末次研究所

要目	
鮑毓麟氏談	治安維持の責任を全ふした事が光榮だ

治安維持の任を全ふした事が光榮だ

日英米和四國公使の目前で

鮑毓麟氏雄々しくも語る

JON 1 01928

北京

【北京九日東方消息】東獄廟から引揚げた日英米和四國公使並に武官は治安維持會に鮑毓麟を訪問した仄聞する所によれば四國公使は鮑旅長と會見せめて鮑氏の治安維持に對する努力を謝し今日の災厄を慰め現當外交團としても默視するに忍ばざるを以て直に南苑に韓復榘を訪ひ嚴重交渉すべしとの事なれば安心されたしと述べたるに對し鮑旅長は各國公使の厚意を深謝し

「予は北京内外人百五十萬の懇請によつて治安維持の責を全うし得たことを光榮とす。今日の災厄も覚悟の前だ予には何等やましい所はない予の生命は今や全く五里霧中で或は殺されるかも知れぬ例へ死しても天は予の行爲を是認するであらう外交團の厚意は肝に銘じて感謝の言葉もないが予は外交團の斡旋で身の安全を得度くないから此の問題から手を引かれたい」

と涙をぢく答へた四國公使は何れも彼の態度に感嘆し呉れぐれも慰めその足で直に自動車を驅つて南苑に韓復榘を訪ひ交渉する所あつた。

末次研究所

要　目

琉璃河戰勝敗までは北京は斷じて脫出せぬ

JUN－21928

北京と……張作霖氏大見得を切る

昨日の軍事會議の結果、奉天軍は琉璃河の陣地に據つて最後の決戰をなすに決した張作霖氏はこの勝敗が決するまでは北京を脫出せぬと堅く言ひ放つたといふ

JUN－21928

閻錫山氏に密電を送る

北京　張作霖氏遂に膝を屈してか

張作霖氏は一昨夜の軍事會議の結果に基き昨日閻錫山に密電を送つたと傳へられてゐるその內容は關內引揚げ後の政務處置を托したものだと謂れてゐる

○張作霖氏離京問題で謠言百出、が燕塵筆から駒が出ぬとも限らぬから夢油斷は出來ません。

北京◇JUN－21928

昨夕六時西直門から脫出の說が飛び出た、豐台に準備されてゐた御召列車が昨朝八時西直門驛に廻された所までは事實だが。

◇

昨夜眞夜中に東站に奉兵が集まつたと言ふ噂、これは前線から退却の第五方面軍が一時休憩のところ。

◇

これも昨夜の十時、特別列車で張宗昌氏の參謀長が乘り込んで來た。

末次研究所

要目

[illegible]

一、北伐軍ノ大勢力ニ[illegible]リシ為メ武漢軍モ[illegible]ノ[illegible]

北伐に參加する

武漢軍の主力

約十萬直に石家莊へ

JUN-31928

京　津　◇……李宗仁氏語る

漢口三十一日發（東方）武漢軍の北伐參加に關し李宗仁は左の如く語つた

一兩日來既に開始してゐる云々

已に北伐軍發の號令もつき又武漢に於ける陰謀の存在説も解消したので今や何等後顧の憂無きに至つたそれで武漢軍は愈々積極的に北伐に參加することゝなり已に河南に出動せる第十三、第三十第三十六、第十各軍の外第十三、第十七、第四十四、第十九各軍及獨立第八師も出動に決し之以上武漢軍總數は十四萬に達し內主力約十萬は直に石家莊に集中し殘餘は豫備隊として河南各地に配備さるゝ筈で軍事輸送は

白崇禧氏一行北上す

漢口三十一日發（東方）崇禧は六月一日武漢北伐軍前敵總司令に就任し三日漢口發石家莊に向ふ筈尚三十日朱家驊は武漢北伐軍總司令部兵站監に再任命は同兵站副監兼參謀長に任命さる

一、北伐軍ニ河南ニ入ルモノ（武漢）
第十三
第三十六
第十七　各軍
第十九
獨立第八師

一、出動セシモノ
第十三（一部）
第十七
第四十四　各軍
第十九
獨立第八師

末次研究所

要目

孫傳芳、張宗昌、馬占山等の動向

孫軍は覇縣より

JUN-1928

天津に退却中

京　津直魯聯軍側で憤慨す

孫傳芳氏が前後張學良、楊宇霆兩軍團長と共に歸京した事は既報の如くであるが同氏は形勢不利と知るや直ちに任地に在つた司令部を陽ヶ部ト軍隊には霸縣を經て陸路天津に退却すべき旨命じ本人は自動車にて保定に出で張楊兩軍團長と落合つて匆々歸京したものである孫氏が久しく銀嶺を共にして來た張宗昌、馬玉琨氏等を出し抜いて張楊兩軍團長と共に入京した事は孫軍では直魯聯合軍方面で非常に不快として居り沒落を前に一紛糾持上る因になりはしないかと憂慮されてゐる

孫軍と合流か

于學忠の軍隊

京　津　一兩日中に態度決定

JUN-51928

時局に一大變化

天津の前方に在る舊孫傳芳軍は北倉、楊村間に集結を了つた、同時に奉天第二十軍于學忠軍も楊村方面に移動し孫軍と同一行動を執る事となつた、右兩軍の合流行動は時局に一大變化を與ふるもので一兩日中に其の態度を鮮明にすべく目下最も注目に値し其行動は警戒を要すると言はれて居る

天津目指して

南軍漸く來る

張宗昌軍靜海に集中

後方に怪しの一團

我軍偵察飛行機の齎らせる報告に依れば津浦線方面の直魯軍は張宗昌氏の命令に依り殆んど全部靜海に撤退集中を終つた同軍の最終退却部隊の後方約二邦里の地點に南軍らしき集團の後續し來ると見た、事實南軍とすれば直魯軍の始末が著くと共に天津の前方に南軍が現はるものと觀測される

末次研究所

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

東大研究所

殘留部隊を取纏め 最後まで奪戰 六軍團長の布告

JUN-6 1928 京津

孫傳芳、張宗昌、褚玉璞、張作相、楊宇霆、張學良の六氏は昨日布告を發し今後共に互に一致團結して地盤の爭奪等はせず民國の爲めに盡すから各界は謠言を信ずる事勿れと聲明した布告の原文は左の如くであるが同氏等は殘留部隊を天津を中心に取纏めて閻蔣兩方面との妥協を進め飽迄馮玉祥軍に對抗するのだと豪語してゐる

布告

爲布告事照得近値時局不靖每有不逞之徒從中播弄或僞造電報文件或種々造謠生事希圖離間挑撥擾亂地方某等本爲人息事之旨雖遇事力主和平而衛國衛民戢亂除奸此志決不少懈況我各軍團聯合六十萬衆精神團結尤同抱奮鬪到底之決心爲此布告凡有造謠離間及有妨害治安者除一體嚴密緝辦外對於主使之人一併認眞激查務獲重懲以遏亂萌而安地方爾軍民人等其各凜遵勿違切々此佈

中華民國十七年六月六日

陸軍第一二三四五七方面軍團長

孫傳芳
張宗昌
張學良
楊宇霆
張作相
褚玉璞

要目

兵を二十里外に留め 外人の生命を保護す

治安維持に最小限度の兵を天津に入れる馮玉祥の聲明

JUN-51928

京津

北支は閻錫山に任す

當地にある馮玉祥代表某々氏は昨四日馮氏から大要左の意味の電報に接した

一、華北の政局は閻錫山を推重する

一、我軍の天津入りに當つては自動的に外交上に深甚の注意を拂ひ天津を距る二十乃至三十哩の適當なる地點に到達すれば軍の前進を停止せしめ各方面と連絡して差し當り天津の治安に必要なる最少限度の部隊をのみ入津せしめ誤解なからしむる。

尚外國人の生命財産に對しては全責任を以て保護する此點諸外國人の諒解を希望する云云

末次研究所

要目

舊直隷各軍が團結
獨自の新行動

JUN-61928

京津　奉天軍と直魯軍に對抗

天津乘取りを策す

北倉楊村間に集結した舊孫傳芳軍は改めて齊燮元氏を盟主に戴き于學忠氏の率ゐる奉天軍第二十軍（舊直隷軍）と提携して獨自の新行動に移り始めた、同軍の標榜する所は「奉天軍閥の北方交通機關其他に加へつゝある破壞行爲を阻止し同時に馮玉祥派の策する急激なる改革を緩和して北京天津を中心とする北方の秩序を維持する」と云ふに在り而して（一）奉天軍の鐵道を利用する退却を天津に於て遮斷する（二）津浦線方面に在る直魯聯軍の天津地方擾亂を阻止すると云ふ二大方針を定め着々として之れが確保を期しつゝある、事態斯くなる上は北倉楊村を中心に右更生の直隷軍と奉天軍及び直魯聯軍との間に當然紛擾を起すべく或は明朝あたりから天津附近にて砲火が交へられるかも知れず各國駐屯軍は急に色めき立つて萬一に備へつゝある、一方張宗昌氏は孫傳

末次研究所

要目

芳軍が舊直隷軍を糾合して獨自の新行動
る事を知るや非常に憤慨し之れを坐視するは
地に陷るものであるとて直ちに靜海方面に在る
軍隊に天津集結を命じ内一萬は今朝早くも楊柳青に
到着し爾餘の軍隊も續々北上しつゝある。此分だと
直魯軍と第二元氏の率ゐる舊直隷聯合軍との衝突は
意外に早く起されるかも知れない。

張莊附近の鐵橋破壞

退却奉軍は一時立往生

南軍便衣隊と覺しき者が昨夜張莊附近の京奉線鐵橋を破壞した爲めに昨夜十一時北京を發せる張學良氏の特別列車及び之れに續ける楊宇霆氏の特別列車は豐臺北京長辛店各地に在る百に餘る退却列車と共に全く立往生の態となつた。きなきだに孫傳芳軍の爲めに楊村北倉間を遮斷されてゐる奉天軍はいよ〳〵徒歩にて引揚げる外無き始末となつたが同軍今後の行動如何は天津地方の治安に直接影響あり非常に注目されてゐる。

豐臺でも鐵橋破壞

昨夜破壞された張莊附近の鐵橋は本日正午修理一成し楊張氏等の退却列車は續々天津に入つて來つゝある然るに豐台の東方小鐵橋も何者かの爲めに破壞されてゐる事を英國監視兵が發見日下修理中である。

東大研究所

孫傳芳は遂に下野

同軍は身賣り

JUN-51928

京津

目下の所動搖の色無し

孫傳芳氏は昨三日北京に於て突然下野の通電を發し今朝總參謀長劉宗熙氏と共に來津佛租界の自邸に入つた。孫氏が下野の意を表明するや鄭俊彥氏も即座に之れに倣ひ其他最高幹部は皆隊を離なれて了つたので目下北倉附近に在る同軍は全く主無き軍隊である。然し同軍は某方面の手にて改編される事になつて居り着々手筈が進められて居るから特別の變化無き限り動搖の憂は無い

孫軍の行動に

直魯軍も合流か

戰意が無いのは同樣

只買手が一二の足を踏む

孫傳芳氏の下野は自發的の事は強要されたものでは無く同軍は山東撤退後全く戰意を喪つて居た、名も無き戰爭然かも

數個月

に亘る給料不渡に全く氣を倦ぬ果ては御大孫傳芳氏の無能を叫ぶやうになり敵來れば退くで更に戰爭らしい戰爭はして居なかつたのである、そこで今次の任意退却となつたもので孫氏は今迄奉天軍部に顏向けも出來ず下野した譯である、孫氏を追出した奉軍は河邊行くか、種々說はあるが結局某方面の手で收容され結局は南天白日旗下に歸するらしい、此事は目下折角手結き中であるから詳述を差控るが兎も角特別の理由が無い限り同軍が四散したり又は兵變を起したりするやうな事はなく現狀のまゝで行くべき所に行き着くであらう、そこで孫軍だけは身賣り先が略出來たが

直魯聯軍は如何なる

か、孫軍が悉くそれに傾いたのは張宗昌氏と三姓の大が本位張つてゐるので此の軍隊に對しては買手の方も一二の足踏んでゐるが悲しい東三省へは歸れない事(二)同時に張作霖氏に恩恨を抱いてゐる事(三)此の儘居座つて居れば自滅の外無き事等の理由で同軍があまり氣味を居るのは事實であり張宗昌氏も相手次第では同分は下野し同軍を委せてもよいと云ふ意志で居るらしいから話の纏合では孫軍に合流して之れが某方面の手に依り改編されるかも知れない、尙ほ同軍は

引續き

渤海方面に後退しつゝあり漸次天津附近に集結されるものと觀られてゐる

末次研究所

要目

疑点

主を失つた孫軍
北倉附近集中
注目される行動

JUN-51928

京津

昨日天津の西方中河頭主要地点一帶に後退し来れる孫傳芳軍は天津に入らんとし直魯軍幹部方面と交渉中であつたが直魯軍側では天津に入られては自軍の存立が危ふくなると内心大いに狼狽し「天津には各國軍隊が駐在して居て近付くのは危險であるから」と口實を設けて之れを敬遠したので止む無く同夜は附近の村落に露營し今早曉から北倉（天津中央停車場の次驛）に向つて移動を開始した、斯くて先發の一縱隊は九時前後北倉に入り更に楊村に移動中であり殘りの一縱隊は同地を距る南方十四五里の村落に在るが第一に困つてゐるのは給與の問題であり總司令を失つた同軍今後の行動は相當警戒を要する

末次研究所

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com